

## 研究発表要旨

# アイリス・マードックの作品に読むブロンテ的要素

小田 夕香理

マードックの『ユニコーン』とシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』、そしてエミリ・ブロンテの『嵐が丘』には、多様な共通点がある。

まず『ユニコーン』と『嵐が丘』を比較すると、ともに孤立した二軒の家を舞台とし、それらの孤立した世界に属さないよそ者（『ユニコーン』のマリアンとエフィンハム、『嵐が丘』のロッ

クウッド）が存在するなど、類似点が多い。しかし、マリアンに注目すると、『ユニコーン』と『ジェイン・エア』の関連もまた明白である。彼女は、よそ者であり、「家庭教師」であるという点においてだけでなく、因習的な社会からの「解放」と「自由」を情熱的に求める女性であるという点においても、『ジェイン・エア』のヒロイン、

ジェインに重なるのである。

そして、マリアンとジェインに見られる「自由」と「拘束」のテーマは、これら二つの作品の結びつきを確かなものとする。両作品には「閉じ込められた」妻がおり、二人はその妻たちの存在を、「自由」を求めて「家庭教師」となったゲイズまたはソーンフィールドという屋敷で知ることになる。つまり、二人が見つけるのは「解放」や「自由」ではなく、「拘束」なのである。彼女たちには、「閉じ込められた」妻の「拘束」に意図せずして関与する側面もあり、さらに、ゲイズやソーンフィールドにおいて彼女たち自身がほとんど「拘束」されるという共通点もある。二人にとってこれらの屋敷は、一時的に「自由」を感じさせることはあっても、「拘束」に加担させられ、自らも「拘束」されかねない、危険な場所なのである。

「自由」と「拘束」は、『嵐が丘』を想起させるテーマでもある。ヒースクリフの身分を意に介さず、彼と親密に接する「自由」を謳歌していたキャサリンは、彼への愛を貫かず裕福な隣家のエドガーと結婚すると、世間の因習に「閉じ込められて」いると感じるようになる。つまり、キャサリンもまた「拘束」される女性なのである。

『ユニコーン』の最終章においては、マリアンは表舞台に表れない。エフィンハムが同じ電車に乗り込む彼女を遠くから見かける様子は描かれるが、これは、彼女がエフィンハムを通してしか接することのできない遠い存在となったことを示唆しているように思われる。また、三人称で語られる彼の思考においてマリアンが言及される箇所

は、彼女がエフィンハムに庇護されるべき、か弱い存在であるという印象を与えるものでもある。つまり、この最終章は、彼女が男性の庇護の外からは手が届かないほどに、再び従来の価値観へと組み込まれていくことを示しているのである。マリアンは、社会のあり方に抵抗して「自由」を得ようとするも、ひたすらに危機にさらされ、「自由」を諦めて再び因習的な世界に「拘束」されることを、受け容れざるを得ないのである。

『ジェイン・エア』のジェインは、自立という「自由」を手にしても、最後には因習的な「拘束」でもある結婚を選ぶ。『嵐が丘』のキャシーは、母親のキャサリンが「死」をもって因習から「自由」になっても、ヘアトンと結婚し、キャサリンにとっての「拘束」に収まる。マリアンもジェインも、そしてキャサリンも娘のキャシーを介して、最終的には自らを因習の内に「閉じ込める」のであり、『ユニコーン』と『ジェイン・エア』、そして『嵐が丘』を結ぶのは、「自由」になれない女性たちの「不安」や「不満」がくすぶっている、この状態である。

ブロンテ姉妹の作品は、女性が従来からの価値観に「拘束」されて苦悩するという点で、マードックの想像世界に関与している。そして、姉妹の作品の「拘束」される女性たちは、現在もなお、世間に「閉じ込められる」女性たちの共感を喚起し、現代にブロンテの要素をもつ多くの小説が存在する一つの大きな要因となっているのである。

※本研究は JSPS 科研費 JP16K16784 の助成を受けたものです。